



TITLE:

日帝統治下における神社参拝と朝鮮キリスト教

AUTHOR(S):

金, 文吉

CITATION:

金, 文吉. 日帝統治下における神社参拝と朝鮮キリスト教. アジア・キリスト教・多元性 2003, 1: 65-82

ISSUE DATE:

2003-03

URL:

<https://doi.org/10.14989/57672>

RIGHT:

アジア・キリスト教・多元性 現代キリスト教思想研究会

創刊号 2003 年 3 月 65～81 頁

日帝統治下における神社参拝と 朝鮮キリスト教 － 朝鮮教会の神学思想と神社参拝 －

金 文吉

1. 序論

朝鮮(以下韓国と呼ぶ)キリスト教は、神社参拝の問題という大きな試練に直面したのは 1910 年から 1945 年の間の韓国植民地時代であった。この神社参拝は皇民化政策の一環であり、韓国民族を所謂「内鮮一体」思想によって鼓吹するものであったが、この「内鮮一体」思想を鼓吹する方法は日本神社への参拝を強制することであった。当時神社参拝に関して攻撃的たたかいがはじまったのは、韓国キリスト教の教理においてであった。日本帝国主義が韓国キリスト教界を抹殺しようとしたことは、直ちに韓国民族を抹殺することであると考えられた。⁽¹⁾このような見解は日帝統治下の韓国教会が民族キリスト教へと転換したことを意味している。日本帝国統治下の韓国の神社はソウルをはじめとして 1919 年から 1932 年まで各所に 51 余社が建立され、⁽²⁾祖先を祖神とする熱烈な信仰をそのまま皇室を尊崇することへと、氏族祖神を皇室尊崇へときりかえ、天皇を現人神するものであったのである。

神社参拝が最初に強要されたのは、平安南道(現在は北朝鮮)の安武知事が満洲事変の際に、戦没将兵慰霊祭への参席を要求したときであった。1938 年 9 月 10 日、韓国基督教長老派第 27 回総会においては、日帝官憲の弾圧的不法行為によって全キリスト教信徒は神社参拝をするよう義務づけられた。⁽³⁾

本論文においては、神社参拝に関して、日本帝国統治下にあった韓国キリスト教界の思想を解明し、同時に自らの生命を懸けて神社参拝を受けつけなかった人々の信仰を考察したいと思う。一方に、神社は宗教ではないと主張して神社参拝を受け入れた教団ならびに多くの人々が存在した。しかしまた他方、神社参拝が宗教であり偶像崇拜であるとの立場をとったために投獄され殉教した人々が多く存在し、1945 年 8 月 15 日に獄中から解放されたのである。さらに、以上の動向との関わりで、今日の韓国キリスト教がどのようなになっているかについても論じたい。

2. 神社参拝強要下における韓国キリスト教の思想

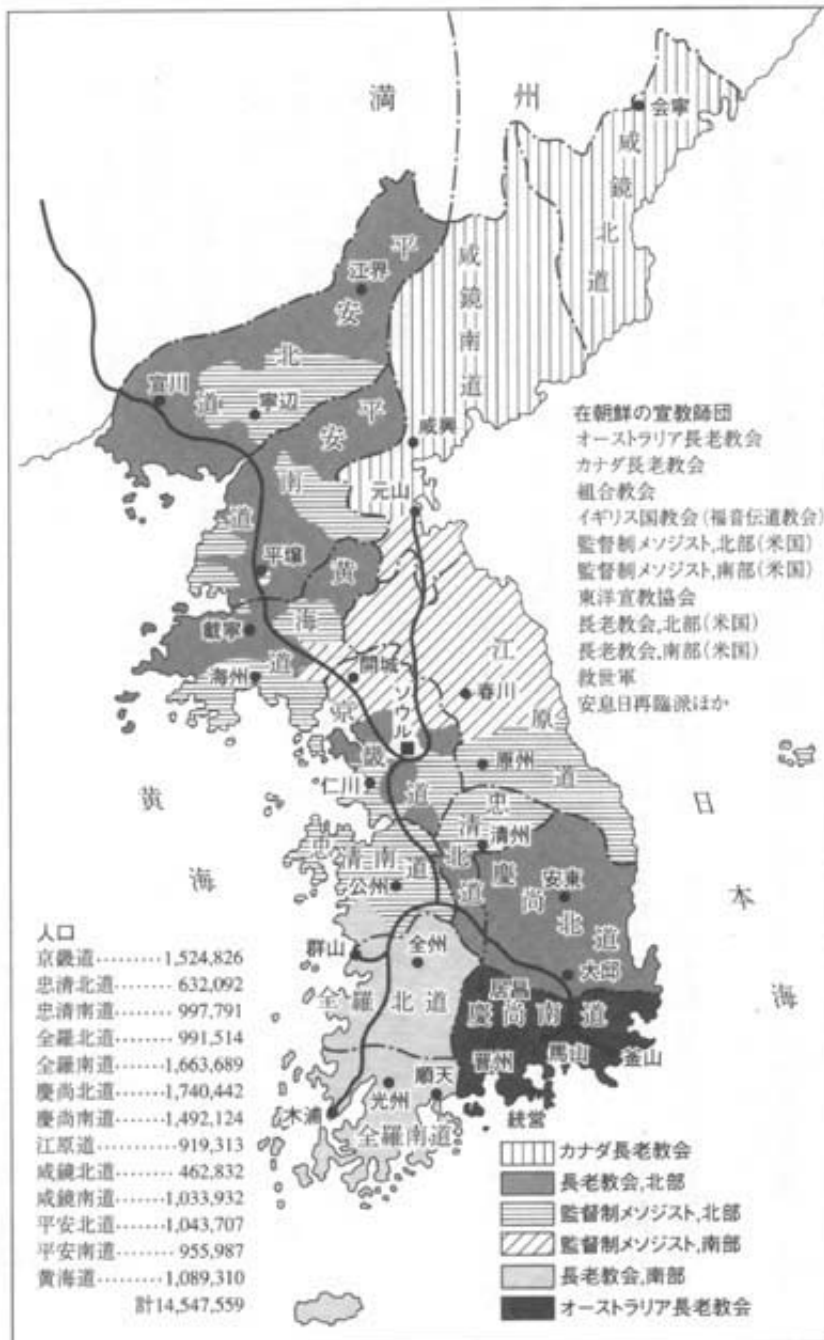
韓国は 1885 年に米国と修好条約を締結し、封建思想から西欧思想への門戸を開き、それとともにキリスト教宣教事業が開始された。1883 年から 1886 年にかけて、医師 3 人と宣教牧師 2 人が初代宣教師として入国した。まず、1883 年 9 月 20 日に米国北長老教会の H.G.Allen(医師)、H.G.Underwood 宣教師、H.G.Appenzeller 宣教師がともに入国し、さらに 1885 年 4 月 9 日に米国北監理教会牧師であり牧会宣教師でもあった W.B.Scranton が、その翌月には彼の母親 Mary.F.Scranton が入国した。又、同月、米国北長老教会医師であり宣教師である J. W. Henon が入国して、医療事業や教育事業に携わった。当時、韓国の各地には熱病が流行しており、⁽⁴⁾ 韓国における宣教事業の中で一番必要な宣教方法は医療事業だったのである。医療伝道に多忙な宣教師たちは平壤を宣教本部と定め、その頃の平壤はエルサレムと呼ばれた。⁽⁵⁾ 初代の韓国宣教は封建思想に耽ける為政者たちによって迫害を受けたが宣教師迫害を免れた。それは 1884 年 12 月 4 日起った甲申政変(李朝高宗 1884)の際、朴泳孝や金玉均ら独立党(開化党)による閔氏一派の事大党政府の転覆(国政を刷新しようとして起した政変)において攻撃された保守党の首領閔泳翊を、医師宣教師の H.G.Allen が治療し、彼の生命を救った。そのうわさがひろまり西洋医療技術が認められるようになったことは、宣教の力となった。H.G.Allen の働きにより、国営病院(広恵院)が設立され、彼は国営医師として王室に出入することが許された。⁽⁶⁾ 韓国初代の宣教師たちが所属していた教団の宣教地域は図表 1 に示した通りである。

1889 年 10 月には濠洲長老会の H.G.Bavis 牧師姉妹が入国し釜山を中心に活動し、またさらに、1892 年 10 月 20 日に入国した米国南長老教会の N.D.Raynolds が湖南地方を中心に活動した。その後、1898 年 9 月 8 日にカナダ長老教会の宣教師たちが咸鏡南道を中心に宣教を行うなど、全国に福音が伝えられた。

1899 年に入国した米国長老教会は湖南地方を中心に宣教したが、韓国の宣教のあり方に関して、初代宣教会合同説を主張した。その初代宣教会合同説とは、長老教会宣教府協議会(Presbyterian Council of Mission)を組織し、韓国宣教において改革信仰と長老教会政治を採択するように合意することを内容としていた。⁽⁷⁾ こうした韓国初代宣教師の宣教における相互融通性については、C.A.クラーク著『韓国教会とネヴィアス宣教方法』(Korean Church and the Nevius Method)によく記録されている。⁽⁸⁾

宣教師らは、先ず医療事業として、国営広恵院と済衆病院などの病院を開院した。同病院は国王、貴族だけでなく、貧しい人々をも、キリスト教の愛と神への奉仕をもって差別なく治療した。⁽⁹⁾ 他方、教育事業が最初に始ったのは H. G. Underwood 宣教師と H. G. Apenzeller 牧会宣教師によってであり、彼らは 1885 年做新学校と培村学堂を創設し、現代開化教育である英語、自然科学、聖書学などを教授した。キリスト教宣教の方法はアジア各地で同じであっ

韓国地図及び宣教地域（図表１）



拙書『近代日本キリスト教と朝鮮』133頁

たが、特に韓国の宣教が福音宣教に先だって社会奉仕に目を向けたことは世界の教会に誉ることのできるであろう。もし、封建制度の下において聖書による福音宣教が先に開始されたとするならば、宣教事業は、韓国民族の儒教的土台となっている先祖祭り(ゼサ)や孝思想より大きな攻撃を受けてしまったであろう。この点から考えると、初代韓国宣教師は韓国の伝統文化について深く研究していたと言えよう。

(1) 初代宣教師の神学思想に見られる福音主義神学

中国と日本において韓国よりも早い時期に宣教されたため、韓国宣教師は中国や日本宣教方法を取り入れることになったが、韓国キリスト教の核心的な神学思想が打ち立てられたのは根本主義神学においてであり、この神学を基礎として韓国キリスト教は成長した。韓国キリスト教はピューリタンの信仰を真正面から受け入れ、純粋な福音と敬虔を第一の生命と考えた。彼らの信仰と神学を分析するならば、政治と宗教とが分離していることがわかるであろう。この福音主義的信仰は、復興会 - これは中国や日本のキリスト教には見られない宣教方法であり、年に数回以上それぞれ一週間かけて行われる特別集会である - という韓国キリスト教独自の集会のあり方によく現れている。⁽¹⁰⁾

このような宣教方法 (Nevius による) は、韓国キリスト教が民族教会として成長するためによい条件となった。しかし当時宣教師の間でも、神社参拝については、意見の不一致があった。一部の宣教師は、日本帝国主義によって韓国キリスト教に強要された神社参拝を無言のまま受け入れた。しかしまた、一部の宣教師は神社参拝を拒否したため公職より追放され、掲げ句の果てに帰国措置処分まで受けた。もし宣教師が福音と国家政治とを同一視し、神社参拝を受け入れたならば、韓国キリスト教への大迫害はなかったであろう。また反対に、もし福音主義の立場で神社参拝を全面的に拒否したならば、宣教師はみな大迫害を受け追放され、韓国は宣教する時期に宣教師がいない国になっていたと思われる。当時の韓国キリスト教信者は宣教師を救世主とみなしていたことから考えれば、霊魂と肉身の求愛者である宣教師が追放された場合、信者たちは牧者がいないさまよえる羊となってしまったであろう。

韓国初代の宣教師らの信仰は米国ピューリタンのであり、彼らは禁欲的思想(禁酒禁煙主義など)をもって宣教した。彼らの神学の核心はパウロ的な超自然的な神学であり、聖書を尊重し、かつ絶対視するものであった。当時平壤神学校の講義中心は米国プリンストン福音神学方式であって、神学生は一般の学問よりも聖書を重視として神学を研究したのである。このような福音主義神学に対して反旗を掲げたのは、⁽¹¹⁾外国から帰国した韓国人神学者であった - そのほとんどは日本で勉強した人々であった - 。福音主義神学者と帰国した韓国人神学者が主張

する自由主義神学とは相互に意見が対立しており、宣教師たちは、新思想である自由主義神学を禁止した。平壤神学校の馬布三悦博士は説教の中で、「兄弟たちよ私たちは 40 年前の福音を信じ伝播しよう」と述べている。⁽¹²⁾

自由主義神学の代表的な学者としては、金英洙牧師が挙げられるが、1934 年に彼は「創世記の著者はモーセではない」と主張した。彼のこの主張は第 23 回総会で問題になった。同年金春培牧師(日本関西学院大学神学部卒業)は、「女子は教会では静かにしよう」という考えが地方の風習であり、聖書の真理ではないと主張した。1934 年 12 月 6 日監理教の柳 基牧師は『アビングトン聖書註解』の翻訳を出版したが、同じく著書を別に翻訳していた長老教会の蔡弼近、宋昌根、韓景識、金在俊牧師らは 24 回総会において、柳訳の内容をめぐって論争し、柳訳再版時に間違っている部分を削除するように主張した。金在俊らによる『神学指南』論争が高まる中で、韓国キリスト教は新しい転換期を迎えたのである。⁽¹³⁾ 金在俊や蔡弼近らは韓国神学大学を設立したが、これが今日の韓国神学大学に他ならない。

(2) 金教臣と韓国の無教会

金教臣は、1901 年 4 月 18 日に韓国北方咸鏡南道咸興砂布里において、父金念熙と母楊慎の長男として生まれた。1903 年に彼が 3 才のとき、父は 21 才の若さで死亡した。しかし、金教臣は父から儒教を受け継ぎ、孝と道徳心が教育の全てであるといった家庭に育ったのである。金教臣は 1912 年に咸興清州韓氏と結婚し、2 男 6 女をもうけた。韓国の当時の風習では、男子は結婚が早く、新婦は夫よりも 2～3 才年令が上であることが珍しくなかった。

金教臣は 1916 年に咸興公立農業学校を卒業し、1919 年韓国民族独立運動が起った年、勉強のため来日し東京の正則英語学教に入学した。修学中の 1920 年 4 月 10 日に東京牛込で、東洋宣教会の路傍説教に深く感銘し、同月 18 日に、失来町の聖潔教会に出席し、新約聖書を購入した。これが信仰への最初の出発点となった。同年彼は内村鑑三先生の門下生になり、7 年間聖書を学んだ。東京郊外の柏木にある内村鑑三の屋敷内には、今井館という集会所があった。ここで行われた集会は、一般の教会のように誰でも自由に出席できるものではなく、内村から許可を受けた人々だけが集ったのである。集会はきびしい緊張した雰囲気で行われ、出席者全員は自由と独立精神と責任感を強固にする訓練を受けた。⁽¹⁴⁾ 当時内村の門下生の中で、『聖書之研究』から大きな感化を受けた者には、咸錫憲、柳達永、宋斗用の外に 6 名の韓国人がいた。⁽¹⁵⁾ 金教臣は、帰国後「私は恩師をもつ者である」と告白し、韓国の無教会創始者となった。金教臣は、矢内原忠雄が最良の無教会主義者であると宣べ伝えたほどの信仰者となった。

⁽¹⁶⁾

金が帰国したのは 1927 年であるが、帰国後彼は咸興にある永生女子高等学校の教員となり、

同門6名の者とともに『聖書朝鮮』を創刊した。1928年にソウル養正高等学校で教鞭をとるようになってからも、経済的な面を含めて、『聖書朝鮮』の刊行に全力を傾けた。金が韓国に帰国した後、矢内原忠雄は68回、韓国で集会を持ち、金とともに無教会主義思想を韓国に宣べ伝えた。この矢内原の集会内容は、『嘉信』掲載の文章より知ることができる。⁽¹⁷⁾こうして、金はソウル養正高等学校に奉職の間に、『聖書朝鮮』を執筆しながら学生たちに伝道し、日本帝国統治下の韓国キリスト教が民族教会として成長するように熱心に宣教したのである。

金は旧約聖書のイスラエル民族の思想に影響された、いわば、エレミヤののような預言者であり、いつの日か日帝の圧迫から解放されることを信じていた。金の書斎にはエレミヤの肖像画がかかけられていた。彼はエレミヤについての講義の中で、「エレミヤは亡国の預言者としての召命を受けたときにも、大祭司長の誰からも按手礼を受けず、また特定の教派に属することも免許状を受けたのでもない」と語った。⁽¹⁸⁾金は北漢山の下に自宅を自らの手で造り、朝4時頃に起きて閑寂な山の上で民族と韓国のために、あつい涙を流しながら祈り、常に預言者のような生活をしていた。時々学生たちを連れて山上で集会を行い、春に草花が再び新しい芽をふくように、私たちの民族にも独立の日が到来すると教えた。彼は、その力は「君たちの偉大な抱負と希望のうちにあり、熱心に勉強せよ」と訴えた。金の信仰の核心は、個人の魂の救いよりも民族全体を愛する信仰を、規律ある信仰よりも自由な神の愛に根づいた信仰を強調することにあり、既成教会が行うような復興会などは禁止した。⁽¹⁹⁾内村鑑三と同様に、金も既成教会の行うような洗礼は行なわなかったが、その際に、金が問題にしたのは、単に無教会的な立場から洗礼や礼拝が不必要であるということではなく、むしろ日曜から土曜日まで一週間を通して神を礼拝する心を持ち続けることが不可欠であるということだったのである。

(20)

金が韓国で無教会の活動を行っていた頃、韓国のキリスト教社会は福音主義であったため、金は外国宣教師ならびに既成教会から多くの圧迫を受けた。当時、平壤神学校校長であったマボサンエル博士は、「近代において新しい福音を伝える者は誰か、気をつけよ」といった。⁽²⁾

¹⁾金の無教会思想は韓国初代福音主義思想にとっては、全く妥当性を有していなかったのである。しかし、日帝統治下におけるキリスト教迫害の時代は、金の無教会の発展にとって良い時代であったと言える。

上述したように、金は旧約聖書の研究に全力で打ち込み、とくにエレミヤ書を繰り返し読んだ。その影響で、金は民族の苦難が主の十字架の痛みと同じであると感じ、またエレミヤのように亡国時の悲哀に涙した。彼は、日本統治下の韓国と古代のイスラエル民族とを同一視したのである。こうした民族と聖書の結びつきは、『聖書朝鮮』から明らかに読み取ることができる。既成教会が宣教において復興会と教会開拓に没頭したのに対し、金は『聖書朝鮮』という月刊誌によって民族への愛を実践したのである。それは、彼が博愛精神をもって、社会か

ら疎外された癲病患者に愛を注いだことにも現れている。当時「愛の原子弾」と呼ばれ、韓国キリスト教の癲病患者指導者であった孫良源牧師も、獄中生活にあって、金教臣から多くの影響を受けた。⁽²²⁾

金教臣が実践した宣教の愛は見えない所から見える所に発展した。金は 1942 年 3 月、『聖書朝鮮』156 号に短文「弔蛙」を掲載したために、多くの迫害を受け、ついに投獄されたが、それは彼の『聖書朝鮮』を通した日本帝国主義との闘争の開始であった。全国において『聖書朝鮮』は押収され 発行を禁止された。金は 1 年の投獄の中で、民族キリスト教者としての信仰を深化させた。金の 1 年間投獄生活こそ無教会の結実と言えよう。獄中の検事による取調べに対しても、金は皇国臣民の誓詞は亡国臣民の誓詞であり、日本帝国の天皇も被造物にすぎず、日本帝国神社参拝は一生の悪毒物であると主張した。⁽¹³⁾ 出獄後、彼は強制労働によって人間の尊厳蹂躪していた日本窒素肥料会社に入社して、その余生を終えた。彼は日本窒素肥料会社でも、医療、住宅、福祉などの改善に全力を尽くした。しかし、1945 年 4 月 25 日に発疹チフスに感染し、8 月 15 日の光復日の 4 日前に、急逝した。日本の矢内原忠雄は金の逝去に対するメッセージの中で、金の霊が死を通して肉体から解放されたように、「神の手で全民族が解放された」と述べたが、数日後この預言はその通りになった。⁽²⁴⁾

(3) 神秘主義者吉善宙牧師と李竜道牧師

韓国キリスト教が神秘主義的信仰として成長した背景には、初代の宣教師たちの福音的信仰と日本帝国統治下における迫害のあったことが指摘できる。この神秘主義が展開したのは 1930 年代であったが、その代表的人物として、吉善宙牧師と李竜道牧師が挙げられる。

まず吉善宙牧師から論じることしよう。彼は 1869 年から 1935 年の間に韓国キリスト教の大復興伝道者として大いに活躍したが、⁽²⁵⁾ 韓国キリスト教総会長の経歴を持ち、1919 年 3 月 1 日に行われた反日運動の主要人物 33 名の中、唯一の韓国神秘主義者であり、その先駆者であった。彼は、日本帝国主義下の韓国統治がローマ帝国下のユダヤ民族統治と同一の関係にあると考え、またイエス再臨の思想を訴えた。これが彼の神秘主義の核心である。つまり、聖書の黙示録を数多く引用し、また主イエスの降臨の讃美歌(韓国讃美歌 192 章など)を好んで歌った。この讃美歌は、韓国の歌に変曲され、老若男女間に広く愛され歌われた。⁽²⁶⁾ 彼は、天国は力を尽す者が受け取るという聖書的な思想に立って、絶えまなく教会でも祈った。韓国教会では、その初期に時代から、朝禱会、禁食祈禱、徹夜祈禱が盛んに行われ、神秘主義的思想が広まった。彼は、毎日神の祈りの中でイエスキリストの声を聞き、霊に満たされて説教した。

彼は、日帝統治がローマ帝国と思想的に同一であると、日帝総督を向こうにまわして真正面

から力説し、「真理の本質は自由であり、自由を弾圧するのは罪だ」と断言した。⁽²⁷⁾

旧新約聖書全体を 13 回、黙示録を 1200 回耽読した彼にとっては、「火が燃えれば燃える程広がるように、日本統治は悪魔の手である」との考えは、至極当然のことであった。

次に李竜道についてであるが、彼の生涯は 1900 年から 1933 年の短い生涯であった。彼が監理教会の牧師となった 1930 年代の韓国キリスト教は、その全盛期における復興の第一歩を踏み出した時期であり、彼の新しい宗教運動が開始されるとき、彼も既成教会の圧迫の中を歩まねばならなかった。⁽²⁸⁾彼の神秘主義的な信仰は、現実の悲しみを十字架を慕い愛するよろこびの内に無言で受け取る無言の信仰であった。無言というのは彼が 25 才の時、或る教会で自分は無言の信仰者であると語ったことによる。聴衆は日帝統治下で無言の内に泣く李竜道の心と自らの心が相互に通いあうのを感じた。彼の無言にはその内に多くの意味を含んでいる。即ち、「正統教会と日帝統治」のイデオロギー的な問題である。また、彼の信仰の核心は「血管的連結、生命の耳環」などと表現されるが、それは既成教会が彼に反対する原因となった。この説は後に「血分け運動」になり、統一教会(原理運動、教主文鮮明)に影響を与えたと言われている。

ここで統一教会について簡単に述べておこう。文は 1920 年旧暦 1 月 6 日に長老派キリスト教信者の家庭内に生れ、16 才の時「天の啓示を受けた」と語っている。昭和 16 年(1941 年)に江本竜明という日本名(本名は文竜明)で京城商工実務学教(当時の学校長は土居山洋)に学び、その後渡日して早稲田大学電気工学科(当時専門学校)に、山本朋成という日本名で入学した。土居山洋と友人林山は、文は京城商工実務学校時代にはクリスチャンではなかったのではないかとの疑問を持っている。⁽²⁹⁾

文鮮明氏は日本で 8 月 15 日を迎え、平壤に帰った。日本帝国主義が犯した罪に対する悔い改めの運動において、既成教会も文鮮明に同意することが可能であった。茶本繁正によれば、この運動の中で文の「血分け運動」思想が展開され、今日の「原理運動」となった。なお、「血分け運動」は神秘主義者李竜道と黄国柱思想を受け継いだものであるが、それは、人類は罪を犯したサタンの後人であり、この罪を取り除くには真の新しい血を受けることが必要である、との思想に基づいている。⁽³⁰⁾

以上をまとめると、吉善宙の神秘主義はイエス再臨主義論であり、李竜道の神秘主義は無限の祈祷体験による「血分け運動」であったと言える。

(4) 日本組合教会と韓国教会との相違

1910 年から日本帝国主義は、韓国に対して皇民化政策運動を行なった。この裏面で日本組合教会が教化政策運動に行なったのは、韓国既成教会の信仰形態では天皇臣民になるのが難し

いと考え、日本的キリスト教を伝えるためであった。それによって、韓国キリスト教は霊と肉の試練を受けた。つまり霊とは組合教会の教化政策であり、肉とは日本の皇民化政策としての神社参拝である。日韓「合併」について誰よりも喜舞したのは、日本組合教会の牧師たちであり、例えば組合教会の有力な機関誌『新人』において、海老名弾正は「神の国建設の為唯一の道だ」と力説した。⁽³¹⁾また、1910年併合の10月に行われた年次総会の折、万場一致のうちに朝鮮伝道を推進することが決議され、翌年1911年6月に渡瀬常吉は日本組合教会の初代宣教師として韓国に渡った。彼は韓国宣教師になる前は組合教会教師であり、韓国キリスト教を神道化すること（キリスト教異質化宣教）が皇民化政を推進する唯一の方法であると考え、明治40年8月15日に「朝鮮伝道論」という論文を『基督教世界』に掲載した。⁽³²⁾これに対して、韓国キリスト教の宣教に反対したのは日本キリスト教界の中の少数の者、特に内村鑑三の門下生たちであった。柏木義円 - 安中教会牧会中に『上毛教月報』を執筆 - は、『上毛教月報』の中で渡瀬の「韓国伝道論」に対して反対意見を表明した。⁽³³⁾韓国キリスト教界では、日本組合教会を世俗的な、しかも、墜落したキリスト教と見なした。⁽³⁴⁾渡瀬常吉氏は京城に漢陽教会と平壤には箕城教会を設立したが、その宣教目的は進歩的な神学思想を伝え、既成教会の有力な人物を全力で買収することであった。⁽³⁵⁾組合教会の教化政策は韓国キリスト教を皇民化すること、即ち、「内鮮一体」を目的とし、韓国キリスト教を総督府に服従するように教え、総督府より年額6千円の機密費補助金を受け、それを宣教に使用した。また有志たちの寄附金も受けた。1919年3月1日に運動が起り、組合教会の渡瀬は前述の行為に関しては、語る言葉にすら窮したことは当然であった。すなわち、『基督教世界』の中では沈黙を守り、同年4月10日号に「真想後策」という論文を掲載した。⁽³⁶⁾1919年6月1日の『基督教世界』の社説中で、彼は日露戦争の最後の勝利が韓国民族の精神を征服することにあると力説したが、それにもかかわらず、3・1運動が起ったため、恥ずかしさのあまり沈黙したのである。⁽³⁷⁾韓国キリスト教を皇民化政策に順応させようとしたことは、「同化政策」の促進を意味した。⁽³⁸⁾当時の日本帝国主義と韓国長老教会の国家行事については、下記の表を参照いただきたい。

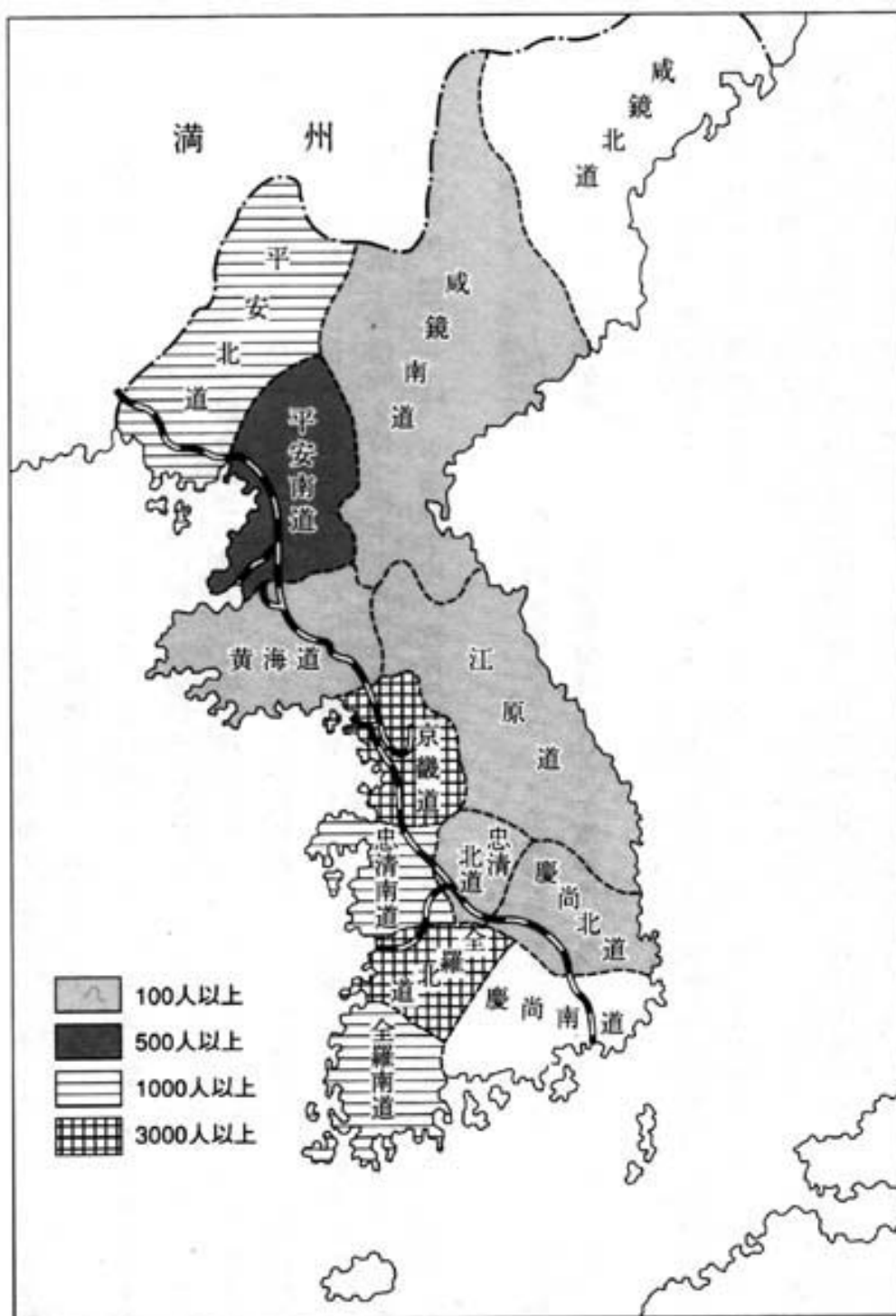
種 目	昭和12年	昭和13年	昭和14年	計
戦勝祝賀会	86回	161回	357回	594回
武運長久祈祷会	2,042回	3,218回	3,793回	9,053回
国防献金	4,545円	5,093円	6,163円	15,804円
其他献金（鎗器）	45個	180個	83個	308個
時局講演会	296回	456回	605回	1,580回
慰 問	14個	58個	109個	181個

慰問袋	209個	594個	777個	1,580個
前線皇軍慰問金	-	-	600円	600円
恤兵会	521円	648円	557円	1,726円
愛国班	-	-	357	357

井上秀雄著 『セミナー 日本と朝鮮の歴史』東出版 1973 年 289 頁

日本組合教会の宣教方法は、既成教会を誘導するために親睦団体を組織し、既成教会のメンバーが教会開拓と神社参拝の指導できるように日本国内を見学させた。⁽³⁹⁾当時の福音新報を見ると、韓国メソヂスト教界の青年たちをはじめ多くの人々が日本現地を見学したことがわかる。⁽⁴⁰⁾日本組合教会の韓国キリスト教会長柳一宣は、大正 15 年 4 月発刊の『朝鮮キリスト教の主義精神並合現状書』の中で、民族の結合は親しさの中にあると述べた。⁽⁴¹⁾

図 2



拙著『近代キリスト教と朝鮮』明石書店 1998 年 135 頁

組合教会が韓国教会の精神を獲得する第一の方法は、韓国教会を世界のキリスト教組織から脱退させることであり、1938 年には韓国教会を世界のキリスト教組織から引き離して、組合教会に加入させた。⁽⁴²⁾ 日本帝国主義思想と相容れない再臨思想を持つ教団 - 聖潔教会、バプティスト教団、セブンスディ教団など - は解散させられた。勿論、吉善宙や李竜道の神秘主義思想も弾圧された。組合教会の「朝鮮親睦会」及び日本帝国主義は 1942 年韓国革新教団を発足させ、既成教会における黙示録説教、旧約的黙示思想と関係ある思想、民族的歌謡は全部禁止した。韓国キリスト教は 1945 年 8 月 1 日をもって完全に日本キリスト教団韓国教会として合併されたが、しかし、10 日後の 8 月 15 日には解放の日を迎えたのである。⁽⁴³⁾

3. 神社参拝に関する宗教論と非宗教論

次に、日帝統治下において神社に参拝した人々の信仰と参拝しなかった人々の信仰を比較検討してみよう。

日本神社参拝が非宗教化であると主張されるようになったのは、1928 年から 1930 年にかけてのことである。ロンドン軍縮条約や浜口雄辛狙撃事件に対して、国粋主義者の動きを活発になると、日本神社参拝を国民的行事することが皇国民思想を鼓吹するための第一武器であるとの考えに立って、神社参拝への反発を弱めるために神社参拝は宗教ではないとの主張がなされるようになった。⁽⁴⁴⁾ こうした中で、韓国では、日本神社参拝について大激論が闘かわされる結果となった。それは 1932 年に平壤市内にある端気山上の魂塔前で行われた春期皇霊祭の祭礼に各級学校の参拝が要求されたことに原因であった。この祭日は特に満洲事変の戦没将兵のための慰霊祭を兼ねたものであり、Mission School の各学校の参加が要求された。平南道の安武知事が道内の各学校に紳士参拝励行命を出したため、Mission School と神社参拝の件に関して正面衝突することになった。神社参拝問題は 1938 年 9 月には長老教会並びに諸教会の問題に発展していった。神社参拝が正式に合法的なものとなったのは、1938 年の第 27 回韓国長老教会総会時においてであり、この総会には代表牧師 88 名、長老 88 名、宣教師 30 名、計 206 名出席していた。総会が再開された時、教会堂は内外数百名の私服警察によって完全に包囲され、講堂下前面には平南警察部長や高位警察数十名が大剣を閃めかせて座っていた。総会長洪宅麒牧師の司会のもとで神社参拝は合法であるとの判定が下った。⁽⁴⁵⁾ 総会が開催される前日、平壤の日鮮親睦会と警官たちは、総会に対する事前準備していたのである。

こうした神社参拝問題拒否する学校は閉校となり、また教会では集会が禁止され、韓国キリスト教は暗黒の世界に入ったのである。一部教育宣教師並びに既成教会の牧師は学校の運営を継続するために、神社参拝をするために会議を開き、韓国キリスト教会内では一団同心の状態

となった。韓国監理教会は、初期から日本総督府と密接な関係を持っていたが、明治 39 年 2 月に伊藤公爵は総督として、韓国メソヂスト教会建設費を当時の金額で 1 万円寄付し、青年会事業の費用として毎年 1 万円寄付した。⁽⁴⁶⁾ また寺内総督も巨額を金額を寄付した。⁽⁴⁷⁾ このように韓国監理教会ははじめから日本組教会傘下の「朝鮮親睦会」と関係を持ち、神社参拝を励行したのである。しかし、聖潔教会やその他の小教団は 1942 年 12 月 10 日に解散させられた。というのも、聖潔教会と小教団では日本ホーリネスの再臨思想家者小出明治の影響により「再臨思想」が強力だったからである。⁽⁴⁸⁾ 日本総督府は再臨思想を危険視し、早い時期から朝鮮聖潔教会を弾圧した。また、神社参拝を拒否した長老教会 70 名の内 50 名は獄死、残りの 20 名は 1945 年 8 月 15 日を迎えた。⁽⁴⁹⁾ 解放を迎えた 20 名の中には、宮城遥拝と神社参拝は罪にはならないから参拝した人々と、宮城遥拝と神社参拝は罪だと考えていた人々があつた。そのため、解放後の韓国教会はその内部で二つの勢力が分離することになる。⁽⁵⁰⁾

参拝した多数の信者と参拝を拒否した少数信者の信仰について考察してみよう。まず、参拝した人々は、神社参拝は日本国に対する愛国的行為であり、宗教ではないと考えた。彼らは、もし宗教であったとしても、全知全能の神はその罪を許してくれると自分の都合の良い解釈をしていた。「朝鮮親睦会」に加入した人々も当初から参拝したが、しだいに既成教会にも参拝を促す運動が起り、日本警察に不参拝者の行動を密告する人々まで現れた。⁽⁵¹⁾ 密告者たちは早くから神社参拝は宗教ではないと主張しており、神社参拝する思想を受容させるために日本に派遣された人々たちである。彼らは、時流に乗って総督府に従い、親日派として行動しながら、神社参拝を受け入れたのである。⁽⁵²⁾

次に、神社参拝を拒否した人たちは、神社参拝は宗教であり偶像崇拜であると考えた。神社参拝に反対した人々の信仰から見ると、神社参拝は霊的姦淫に他ならない。彼らは聖書に絶対服従するという韓国キリスト教の精神を保持しつつ、神の戒めを守り、韓国キリスト教の純潔を守って、獄中で殉教の苦難に耐えたのである。彼らの信仰は終末論的性格を帯びていた。彼らはマタイ福音書 24 章にあるように「思いがけない時」に神が来ると述べ、千年王国建設思想を主張した。当時、讃美歌も再臨思想の曲が多かった。朱基撒牧師や殉教者たちは、死は自分たちにとっては神の使命であると考えた。李基宣牧師は平安北道(今日は北朝鮮)の神社不参拝の主動人物で神社参拝をしないように、次のように教えた。⁽⁵³⁾

- ア、神社参拝をした大学校には入学しないように。
- イ、神社参拝をした教会は、世俗化した教会であるゆえに礼拝には出席しないように。
- ウ、千年王国実現に協力し、参拝を拒否する運動をすること。
- エ、心霊の(霊的)教会を育成することに努めよう。

平安南道における神社参拝拒否運動の主要人物は、殉教者朱基撒牧師とその一団であつた。朴寛俊長老はキリスト教の聖書不法解釈について日本人に正しく教える使命があると考え、安

利叔 - 当時日本留学中 - とともに日本国の第27回国会参席した。彼は、国会議員を前にして「神社参拝は宗教だ」であり、韓国神社参拝を強要しないようにとの歎願書を提出し、旧約聖書列王記上18章40節を引用し、日本神社の神が真理の神か、あるいは、天地創造の神が真理の神かと叫んで対決した。また安利叔が平南知事、宇垣総督、荒本文武長官に送った歎願書の内容は次のようになっている。

ア、エホバ神は唯一真の神である。

イ、エホバ神は天地万物を創造支配する唯一神であり、人類思想を摂理的に導く神である。

ウ、エホバ神を信ずる国は祝福を受け、信じない国は刑罰を受ける。

エ、神社参拝は罪である。

オ、神社参拝を韓国民族に強要しないように。

カ、投獄された人々を出獄させること。

キ、神は日本国を不遠之間滅亡させる。

ク、列王記上書18章20-40節の聖句のようにまことの神を信じよ。⁽⁵⁴⁾

慶南一帯の神社不参拝運動者は、韓相東牧師 - 今日の高神派高麗神学大学創始者 - である。彼は、既成教会の神社参拝は罪であるからその礼拝には参席しないこと、教会上納金を納めないこと、洗礼を受けないこと、信徒との交際を避け、家庭内での礼拝を進め、もし神社を参拝する場合は、子々孫々至るまで天罰が下ると述べている。⁽⁵⁵⁾ また、崔仁圭ら諸氏は、ローマ帝国が衰えたのは神の戒めを守らなかったことが原因しているとし、神社参拝は偶像であり、遠からず日本帝国が滅亡することを望み、獄中生活、殉教も辞さなかった。韓国教会は、こうした不参拝者が考えたように、1945年8月15日についに解放の日を迎えた。日本警察が、1945年8月18日に韓国全土のキリスト教徒を全滅する計画をたてていたということが知られている。⁽⁵⁶⁾

次に挙げる表は、神社不参拝運動の地域分布および指導者グループをまとめたものである。

⁽⁵⁷⁾

「平安北道」(李基宣牧師 (中心人物))

新義州	金化俊伝道師 李光禄執事 金承竜執事 呉永思 金昌仁 沈之鉄
江 界	高興鳳牧師 徐正煥伝道師 長斗熙執事 楊大祿執事
宣 川	金麟熙伝道師 金義弘伝道師 金信根執事 金枝成伝道師 李炳姫執事
博 川	安利淑
寧 辺	朴寛淑

定 州	金亨楽
-----	-----

「慶尚南道」(韓相東牧師(中心人物))

釜 山	許大是宣教師 秋馬因宣教師 趙寿玉女伝道師 孫明復伝道師 金妙年 朴敬愛
馬 山	崔徳支女伝道師 太邁施宣教師 李賛秀伝道師 李約信伝道師
咸 安	李鉞続伝道師
巨 昌	朱南善牧師
南 海	崔尚林牧師
普 州	徐德基宣教師 フェラ宣教師 黄哲道伝道師 善文端長老 李奉思勸師
河 東	朴聖根牧師 金点竜伝道師
昌 寧	韓英源伝道師
統 営	崔徳支伝道師
陝 川	善賛桂執事
山 清	金如原執事

「平安南道」(朱基徹牧師(中心人物))

平 壤

蔡正民牧師 金義昌牧師 李朱元牧師(当時伝道師) 呉真模執事(朱基徹牧師婦人)
方啓聖伝道師 呉潤善伝道師 金枝成伝道師
朴寛俊長老(平壤移居) 安利淑先生 李炳嬪執事
咸日頓宣教師 馬斗元宣教師 李約信牧師

「満州」(諸宣教師(中心人物))

ハルビン	金充変執事
奉 天	朴義ホム伝道師
撫 順	朴演祉執事
安 東	金亨楽牧師 崔竜三 桂成秀 金聖心

「全羅南道」

孫良源牧師

韓国無教会主義者金教臣から

影響を受けた「愛の原子弾」という

4. おわり

図1「朝鮮宣教団の宣教地域」における黒色地域に伝道したのはオーストラリア長老教会であるが、図2からわかるように、この地域は日本組合教会の教会数と信徒数をもっとも少ない地域であり、また、神社参拝拒否運動がはげしく組織された所である。神社参拝問題においては、1945年8月15日以後の参拝教会と不参拝教会の間に争いと教団の分裂というように、現代の韓国キリスト教会のあり方にも影響を及ぼしている。たとえば、不参拝グループは韓相東牧師中心に高麗派教団を作り、現在釜山に高麗神学大学を設立した。日本組合教会は天皇制国家を目指して神社参拝を推進したが、この神社参拝との闘いを通して、韓国キリスト教界はその信仰思想を明確化することができたのである。

注

- (1) 崔在建『神社参拝と韓国長老教会分裂に関する研究』 延世大学大学院神学修士論文 1973年、2頁
- (2) *ibid.*, 33頁
- (3) 崔タン『韓国教会迫害史』韓国イエス教文書宣教会 1979年、19頁
- (4) "The Country", in: H.G.Underwood, *The call of korea*, 1908, p.19
- (5) Sontag, *Sun myung Moon and the Unification Church*, Nashville 1977, p. 79
- (6) 金良善『韓国文化史大系』第 Ⅱ 巻, 宗教編, 高麗大学校民族文化研究所 1972年 577頁
- (7) C. A. Clark, *The korean Church and The Nevius Method*, 1929, p.135
- (8) *ibid.*, p.93
- (9) *ibid.*, p.124
- (10) *ibid.*, p.577
- (11) *ibid.*, p.10

1901(明治 34)年から翌年にかけて植村正久と海老名弾正との間でキリスト論をめぐる論争が行われた。すなわち、20世紀大挙伝道が企てられた際に、福音主義の信仰に立たぬ者を弁士から外したこ

とで、この事態に対して植村は、キリストの神性や贖罪の意義を認めぬ自由主義的な諸教派をも擁る福音同盟会は、伝道の機関としては不適格である との見解を明らかにした(「福音同盟会と大挙伝道」『福音新報』1901年9月)。これに対し海老名は、同文中の「神、人となりて 世に下り」の意味を質したが(「福音新報記者に与ふるの書」『新人』1901年10月)、これを導火線として両者の間で約半年にわたりキリストの神性をめぐる論争が交された。植村は、自由主義神学やユニテリアン主義のイエス理解を排し、キリスト教の本質はキリストの神格と受肉降世、その十字架上の死による罪の贖いにあるとし、この信仰を宣べ伝えることが伝道であると主張した(「基督と其の事業」1902年)。これを対し海老名は、神は父で我はその愛子であるという自ら宗教意識を軸に、自由主義神学の影響を受けつつ独自のキリスト理解を展開し、キリスト降世の目的は人類を導いて神人合一の境涯に至らせることにあると説いた(「三位一体の教義と予が宗教的意識」1902年)。その結果、福音同盟会第12回大会(1902年4月)において、同盟が福音と認めるものは主イエス・キリストを神と信ずるものをいうとの趣旨の決議が採択され、植村の主張に沿った福音主義が公式に承認される形となった。これは、明治20代以来の新神学問題に、ひとつの結着をつけたものといえる。なお両者の論文は『植村正久 其の時代第5巻』(243-438頁)に収録されている。

(12) ibid., p.17

(13) ibid., p.14

(14) 関庚培『金教臣と民族キリスト教』キリスト教図書出版社 1978年、347頁

(15) 宋斗用『金教臣と朝鮮無教会』教図出版社 1978年、18頁

(16) 関庚培『韓国基督教史』教養国史 12巻、世宗大王記念事業会発行 1975年、30頁

(17) ibid., 20頁

(18) カリグローラ『内村鑑三 無教会』新教出版社 1978年、273頁

(19) 剝熙世『金教臣の信仰』 253頁

(20) 朴東鎬『偉大な姿』185頁

(21) 鈴木俊良『内村鑑三の現代』昭和37年、138頁

(22) ibid., 14頁

(23) 李 ジュン イル『ああ、金教臣』 1978年、199頁

(24) 盧平久『金教臣』キリスト教出版社 1978年、69頁

(25) ibid., 256頁

(26) ibid., 144頁

(27) ibid., 48頁

(28) ibid., 22頁

(29) 池明観『韓国現代教会史』新教出版社 1975年、259頁

(30) 茶本繁正『原理運動研究』第1巻 晩耳社 1977年、64頁

- (31) ibid., 68 頁
- (32) 松尾尊兌 『思想』 1978, 11 号 岩波書店、13 頁
- (33) ibid., 14 頁
- (34) ibid., 17 頁
- (35) 沢正彦訳 『韓国キリスト教史』・日本キリスト教団出版局 1974 年、181 頁
- (36) ibid., 683 頁
- (37) 飯沼二郎 『日本キリスト教会朝鮮伝道の三代』 1978 年、201 頁
- (38) 『思想』 1968 年 11 月、16 頁
- (39) 同志社大学人文科学研究所キリスト教社会問題研究会編 『日本近代とキリスト教』 1973 年、85 頁
- (40) ibid., 83 頁
- (41) 『福音新報』 大正元年 11 月 17 日
- (42) 柳日宣 『朝鮮キリスト教主義精神並合現狀書』 朝鮮キリスト教出版 大正 5 年、4 頁
- (43) ibid., 700 頁
- (44) 渡瀬常吉 『朝鮮教化の急務』 大正 2 年、5 頁
- (45) 海老沢亮 『日本キリスト教百年史』 日本キリスト教出版社 昭和 36 年、219 頁
- (46) ibid., 685 頁
- (47) 朝鮮総督府 『朝鮮統治と基督教』 1919 年、6 頁
- (48) ibid., 9 頁
- (49) 日本近代キリスト教資料 『神社問題とキリスト教』 1976 年、391 頁
- (50) ibid., 147 頁
- (51) ibid., 73 頁
- (52) ibid., 49 頁
- (53) ibid., 39 頁
- (54) ibid., 52 頁
- (55) ibid., 46 頁
- (56) 全柄聖 『韓国長老教会の伝道成長史』（高麗神学大学院修士論文）1976 年、33 頁
- (57) ibid., 35 頁
- (58) ibid.,

（きむ・むんぎる 釜山外国語大学校東洋語大学日本語科教授）

